《CELシリーズ》

大阪再発見 Vol.2

written by Tomoyo Kurimoto 栗本 智代

新井ビル

旧大中証券ビル

北浜レトロビル

第9回

大阪モダニズム再見

近代建築物リモデリング(再生)による「場」の創造

『大阪再発見』の試みを続けていると、その発表や研究の機会などを通して、大阪の歴史的な建築物の内部を案内していただくことも増えてきた。例えば中之島公会堂。改修前、初めて3階の特別室に入った時、天井画やステンドグラスなど、その荘厳な雰囲気に息をのんだが、昨年秋のリニューアルオープンで話題を集めている。その他、例えば綿業会館も、地味で上品な外観と内部の豪華さのギャップに驚かされた。特に談話室や貴賓室など、頻繁には公開されていない部屋ほど装飾豊かである。7年程前か、上司の代理で、ある財界主宰の研究会に参加するため、初めて入った大阪倶楽部も然り。そのうち、大阪の近代を象徴する「モダニズム」と表現される大小の建築物が、大阪のあちこちに残っており、一つの大阪の都市文化を形づくっていたことを知った。近代や建築を専門とする学識者の方々により、その歴史や変遷などが既に語られているが、一般には意外と知られていないことも多い。

平成8年、文化庁が登録有形文化財制度を設け、国民の財産としての建築物を見直す動きが出ている一方で、貴重な建築物が取り壊されることも少なくない。そんな中、最近、近代建築物の魅力を倍増する、新たな「場」を創造するような取り組みが生まれている。本稿では、そのような近代建築物が生まれた時代背景としての大阪を紹介した上で、その近代建築物リモデリング(再生)の取り組み事例と、その「場」の可能性を記してみたい。

生駒ビルヂングの鷲

近代都市―モダン大阪―の成立

明治から大正、昭和初期にかけて、大阪は劇的な形で近代化を遂げた。

その背景には、都市機能の近代化と外部への拡大がある。明治七年には、大阪～神戸間に官営鉄道が開通し、私鉄も阪堺鉄道の難波～大和川間（明治十八年）を手はじめに、次々に開通していく。明治三十六年に開業した市電は、それまでの交通手段である舟・馬車・人力車に取って代わり、新たな道路建設を促進した。新淀川、毛馬の閘門、築港などもでき、上下水道の敷設なども完成する。

さらに「軒切（のきぎり）」による道路の拡幅が実施された。軒切というのは、道路を広くするために家の軒先を切り、道路整理拡幅や市電の軌道敷設、都市計画道路建設などを実施したものであるが、通りに面した町家は後退を強いられて、やむなく改築や新築を行った際、洋風建築に変わっていった。その代表例が堺筋で、三越百貨店や銀行、商店などモダンな建造物が並ぶメインストリートとして、新たな都市景観が誕生した。

近代都市として大阪が本格的に歩み出したのは、紡績業を中心とする商工業の勃興によるところが大きく、明治十六年に操業を開始した大阪紡績（現大正区の三軒家に工場があった）の成功が契機となった。その後、次々と紡績工場が建てられ、大阪の紡績業は、全国の中で圧倒的な地位を占め、日本の産業革命の中心として近代商工業都市へ発展した。

一方で、賑わいを生む都市のあり様として、新たなシンボルも誕生した。明治二十一年、「南の五階」と呼ばれた眺望閣、その翌年にできた「北の九階」凌雲閣、生玉の浪花富士など、展望台を設けた高層タワーが相次いで建てられた。さらに第五回内国勧業博覧会、その跡地での新世界やルナパーク・通天閣など、新しい娯楽の場が次々と生み出された。

大正になると、国内経済や世相など、世の中の移り変わりのテンポが早くなってくる。まちには、モダンボーイ・モダンガールが現れ、倶楽部、喫茶店、カフェが流行した。いわゆる「ハイカラの時代」の始まりであった。経済面でも、第一次世界大戦の特需に好景気を記録し、国内紡績などが一挙に発展した。株価が上がり、五倍・十倍の高騰も珍しくないほどであった。当時の大成金たちはこの時期に、阪神間や郊外に大邸宅を建てたという。しかし高騰したのは諸物価全てであり、異常なインフレに給料が追いつかない人々は米騒動をおこし、軍隊が出動する騒ぎとなった。

大正十二年、新しい市長が生まれたことで、大阪にさらなる転機が訪れた。

北浜通りの風景／北浜二丁目から東の市電道路。左の向こうに見える株式取引所の建物は、昭和九年改築以前の古い建物である（写真提供:大阪都市協会）

凌雲閣

初代大阪駅（写真提供:大阪都市協会）

第五回内国勧業博覧会

大大阪の革命的まちづくり

関一（せきはじめ）市長は、大正三年から助役として東京から大阪市に入っていた。都市問題を客観的に捉え、具体的に方針を指し示すことのできる学識者として勧誘されたのである。市長就任後は、理論の実践として卓抜な都市政策を現実のものにしていった。その構想は、都心部を高層建築が並ぶ業務地域に再開発し、郊外住宅地を形成して、業務地域と地下鉄で結び、同時に緑地を保存し、住宅建築を促進して住み心地のよい都市を建設するというものであった。まずは第二次市域拡張として（明治三十年に第一次が行われ、大阪市の面積はそれまでの三倍半である五五・六七平方キロメートルとなった）、西成郡・東成郡全域が編入され、広大な農地を含めた一八一・六八平方キロメートルが、大正十四年四月一日に大阪市となった。この時、大阪市の人口は二二万四八〇四人で、わが国第一、世界でも六番目の大都市になった。

ひき続き大阪の革命的改造計画が実施された。その事業の中心となったのが、御堂筋の建設と地下鉄の開通であった。それまでの大阪の市街地整備は、市電の敷設にともなって街路を新設・拡幅しており、大正四年に開通した堺筋が、近代大阪で初めにできた大通り・メインストリートであった。しかし、荷馬車や自動車などの増加にあわせ、北は梅田界隈に省線（国鉄・現在のJR）や阪急・阪神が集まり、南の難波や阿倍野界隈も、ターミナル周辺が繁華街となって、それまでの中心地であった船場と南北を結ぶ交通路がさらに必要となっていた。

御堂筋と地下鉄の巨額な工事費には、受益者負担金が充当された。受益者負担金とは、都市計画事業で利益を受けたものが、費用の全部または一部を負担するという都市計画法（大正八年制定）にもとづいたもので、要は、御堂筋の拡張や地下鉄によって交通が便利になり、周辺の住民はさまざまな形で利益を享受するから、その利益の代償として一定額の負担金を市に拠出し、市はそれを建設費の一部に充てるというものである。該当する船場商人などから異論が続出したものの、都市財政論の立場にたつ政策として、関市長はこれを強行した。

市役所庁舎から見た淀屋橋南詰。御堂筋拡幅前（上）と拡幅後（昭和四年・下）（写真提供：大阪都市協会）

地下鉄工事中の御堂筋（昭和五年着工）

御堂筋は、幅二四間（約四四メートル）で、梅田と難波の間を南北に一直線に結ぶ舗装道路として計画された。もともと「御堂筋」と呼ばれた道は、北は淡路町から南は長堀までの約一・三キロメートルの幅三間の細い道で、商家や長屋がびっしりと建てこんでいた。それが北の梅田・梅田新道と難波を結ぶ大道路に変わるというので、「そんな飛行場みたいなもの作ってどうするんだ」という声もあちこちから出たという。さらに地下には高速鉄道を建設するというので、市民はたいそう驚いた。用地提供のために生業を奪われ、受益者負担金まで支払わなければならなかった人たちなどを含め、周辺の人々の犠牲と協力のもとに、予定よりかなり遅れた昭和元年十月に、御堂筋の起工式が行われた。

※用地買収面積は一〇万八〇〇〇平方メートル、地主数四八四人、立ち退きに関係した家主など七一九人、居住者一一八五人、新設道路の両側三五間（約六三メートル）の土地所有者から受益者負担金八一八万円を取ったという。

地下鉄計画は、最初、榎坂（えさか）から梅田を経て、難波、天王寺、我孫子にいたるという一号線が事業化され、昭和五年に第一期工事が始まった。当時は世界的に深刻な経済不況に見舞われており、大阪にもあふれていた失業者の多くが、労働者として建設工事に雇用された。大阪は、地盤地質が軟弱で、地下約三メートルで地下水に達するため、多量の湧き水に対処しなければならなかったという。また、堂島川・土佐堀川の川底を潜るという難題、さらに震動による、沿道家屋の損傷や井戸の干上がりなど、さまざまな障害があったが、

地下鉄開通ポスター（写真提供：大阪都市協会）

完成した地下鉄心斎橋駅／豪華なエスカレーターに人々は目を丸くした

昭和八年五月二十日、地下鉄の梅田―心斎橋が開通した。初発電車は午後三時スタートであったが、これに乗りたいと多くの市民が詰め掛け超満員状態で、平常五分三十秒の所要時間が十二分もかかったという。駅構内の美しいタイル装飾、アーチ構造の高い天井にシャンデリア、エスカレーターなど豪華な設備は人々を驚かせ、自慢のタネとなった。その後、昭和十年に難波、十三年には天王寺まで開通し、都市交通のスピード時代が始まったのである。

御堂筋は昭和十二年に完成し、銀杏並木は翌年に植樹された。こうして、大阪近代の都市計画のモデル・象徴ともいうべき大道路が誕生し、今日まで大阪を代表するメインストリートとして風格を保ち続けている。このような「大大阪」のエネルギーは、船場や北浜を中心に誕生したさまざまな建造物・建築物にも反映され、新たな都市景観が生まれつつあった。

赤煉瓦からテラコッタへ

近代建築は、大きく三つの時代に分けて語られることが多い。第一期としては、明治二十年代以前。大阪駅（初代）や泉布観、初代大阪府庁（江之子島にあった）など、大規模な施設が外国人によって建てられた。

第二期といえる明治二十年代以降大正期までは、外国の建築様式を本格的に学んだ日本人による作品が増え、日本中の都心に赤煉瓦の建物が見られるようになった。煉瓦造りの性格から大きな開口部は取れないため、銀行や官庁、オフィスなどに用いられることが多かった。北浜から高麗橋も、その時代は金融街で、赤煉瓦の建物が軒を連ねていたという。現存する代表的なものに中之島公会堂がある。岩本栄之助の寄付を受けた大阪市が、辰野金吾を建築顧問として実施した設計コンペにより、岡田信一郎の原案をもとに辰野・片岡建築事務所が設計し、大正七年に竣工している。辰野は大正三年竣工の東京駅に全力を傾けたといわれたが、それに並ぶ代表作になった。その他、現存する辰野の作品に、高麗橋にある旧大中証券ビル（明治四十五年竣工）がある。

創建時の中央公会堂

構造面でも耐震性が重視されるようになった。というのも濃尾地震（明治二十四年）で、煉瓦や石造りの建物が大きな被害を受けたため、鉄筋コンクリートや鉄骨石貼りへと移行したのである。大阪ではテラコッタ貼りが採用され、モダンな問屋ビルが、昔ながらの町家の合間を埋めていく形で増えていった。ただ、従来の船場の生活様式・伝統の中で、店主やその家族・従業員たちの住居も兼ねており、洋風ビルの上階に和風の座敷があるのも珍しくなかったという。東西に通じる各町には、同業者が寄り集まる傾向があり、それぞれに特徴ある町並みを形成していたので、それに寄り添う形で、小味な都会的意匠でありながら質感の高い個性的な建築が生まれた。同時に、大阪的な個性をもつ建築家たちが現れ、脚光を浴びるようになる。こうして、大正後期から昭和戦前期までの第三期、多様な建築文化が華やかに展開された。昭和に入り、大阪が商業都市から工業都市へ変化する中で、御堂筋の拡幅は、船場の東西街路を主とする空間秩序を崩す契機となった。南北と東西の街路の微妙なバランスの中で、自由でバリエーション豊かな建物が誕生していった。

昭和二十年の大阪大空襲で、大阪は一面焦土と化した。近代建築物は、耐火構造のおかげでほとんどが焼け残ったのではあるが、戦後、従来と異なる都市秩序を目指して建ち始めた数多くのビルの中で、今日までかなりの貴重な建造物が取り壊されてきた。この二十年間で、約六割強の歴史的建築が滅失しているという調査結果も出ている。

平成八年、国の登録有形文化財制度が始まった。築五十年を経過する近代建築を文化資源として評価し、その保護活用を推奨するものである。平成十五年二月一日現在、全国で二九八〇件登録されており、大阪府内での登録数は一九九で全国一である。その中で、建築物を維持保存しながら、この時代に生かす新たな試みが少しずつ芽生えている。

リニューアルされた中央公会堂の3階特別室（もと貴賓室）

近代建築物の再生と活用

現代において、近代建築を活用しながら保存していくことは難しい課題である。建物の老朽化やOA化への対応、賃貸オフィスとしての経営困難など、ソフト・ハード両面での問題をかかえている。登録文化財制度では、改築の際、設計費の半分が補助されるのみであり、根本的な問題解決にはならない。民間の場合は、さらに収益を上げながらの建築物保存という課題がある。

最近もっとも話題を集めたものといえば、中之島公会堂であろう。一時は取り壊しの計画もあったが、市民による保存運動や市議会からの要請などにより、昭和六十三年に大阪市により永久保存が決定された。中之島に本社をもつ朝日新聞社が募った「赤レンガ基金」は、総額約七億六千万円にのぼり市民の関心の高さがうかがえる。平成十一年三月から平成十四年九月まで保存再生工事が行われた。創建当時に戻すという基本方針と、耐震性の強化に重点を置いた大規模事業で、華やかな姿でリニューアルオープンが実現した。さらに重要文化財指定も受けている。一方で、民間による近代建築の再活用において、それぞれのこだわりや発想の転換を生かして、収益性も考慮した個性的な「場」が展開されつつある。

ここでは、北浜界隈の事例をいくつか紹介する。

北浜レトロビル

旧大阪証券取引所の北向かいにある、その名の通りレトロなビル。もともと赤煉瓦造りの証券取引業者の建物が三軒接して並んでいたが、今残るのは、もっとも東にあった現ビルのみ。明治四十五年に建てられた、地上二階地下一階のビルは、戦時中、証券取引所が閉鎖して、建築資材の専門商社である桂隆産業(株)がオーナーになったが、平成六年に倒産した。

その時、もともと大阪府庁で中小企業の診断指導を担当していた小山寿一氏が、退庁を機会に買い取って「北浜レトロ株式会社」を設立。イギリスにこだわった小山氏自身の設計・デザインにより補修・改装されたこのビルは、ティールームとアンティーク・雑貨店舗として再スタートを切った。

「この建物の設計者は不詳なのですが、イギリス人の建築家に習った日本の建築家によるものに違いなく、当時のイギリスの建造物を想像して建てられた感があります。ただそれは、我々が外国で日本庭園を見るようなもので、当時のイギリス人にしたら、あくまで『東洋まじりのイギリス風』だったと思われます。私が最初に見た時は、阪神大震災によるダメージがひどく、蛍光灯や電気の配線が露出するなど、まるで幽霊ビルでした。それをできるだけ、元の姿に戻してあげたいと思ったのです」と言われる小山さん。できるだけ『クラシック』にこだわった空間を創られており、ドアや窓などうまく再利用されている。もともとインテリアや紅茶の趣味をお持ちであったが、趣味を実益に結びつけるために、イギリスの市立カレッジに短期留学し、放課後は買い付けのためアンティークショップを廻ったという。

北浜レトロビル一階／洋菓子と工芸・雑貨ショップ

小山 寿一 氏

「こんな趣のある建築物、今はもう誰も建てられないでしょう。だから、建造時の明治末頃の雰囲気を大切にしたいんです。例えば、電気スイッチやシャンデリアを揃えたり…。イギリスは、何百年もデザインや形など変わらないものが多い。そのように、時代に迎合せず、ブームを追いかけず、三十～五十年かけて、孫の代まで普遍的なものを提供していければ、と考えています。毎年毎年少しずつ、アンティークな飾りを増やしていくのも楽しみですね」。

北浜レトロビル二階／ティールーム

現在は、一階が洋菓子と工芸・雑貨のショップ、二階がティールームとなっていて、独特のやわらかい優雅な時間が流れている。北側に拡がる中之島公園のバラ園が窓でトリミングされ、美しく新鮮に感じられる。平日に、近所のご婦人が、一人でお茶を飲みに来られることも少なくない。「天気のいい日や週末には、どうしても満席になってしまい、本来の空間の味わいがなくなるのですが…」と言われる小山さん。昔の建造物への愛着はひと倍で、その建物がもつ魂のようなものを甦らせたいという思いが「北浜レトロビル」にも反映され、よりあたたかみのある場が育っている。登録有形文化財に選ばれたが、外観だけでなく、内装も負けずにいい時を刻んでいるようだ。

スクラップアンドビルドを繰り返してきた日本と、古い歴史あるものを慈しむイギリスの価値観の違いにより、前者が失ってきたものがいかに大きいか、後者がいかに豊かな時間や場を紡ぐことができるか、その考え方を北浜レトロビルの再生でもって、大阪に最初に問いかけた試みなのかもしれない。

生駒ビルヂング
―コンシェルジュオフィス T4B―

生駒ビルヂングは昭和五年に竣工した。大阪で活躍した商業建築の名手、宗兵蔵の設計、大林組の施工。アールデコ様式で、外観はスクラッチタイルやテラコッタを用いた彫りの深い味わいが特徴である。堺筋と平野町の角地に建っており、生駒時計店として用いられてきた。時計塔の下の窓が振り子の形をしているのがユニークで、装飾の鷲など遊びのあるデザインは、歩いていてもすぐ目にとまる。登録有形文化財に選ばれている。

生駒ビルヂング外観

生駒時計店は、もとは明治三年「大坂屋権七・大権堂」として現在の御堂筋に創業した。御堂筋の拡幅と地下鉄工事のために立ち退きを強要され、現在の場所に新築されたのが生駒ビルヂングである。堅牢なコンクリート壁と各窓のシャッターのおかげで、大阪大空襲や阪神大震災でも目立った被害がなく、現役の建物として存続していた。しかし、設備の老朽化や再度の大震災への対策として耐震補強の必要性が生じていた。生駒時計店代表取締役の生駒信夫氏は、文化財としてのこのビルを「なにわ商人」として、自ら、つまり民間所有のまま維持保存していきたいと考えられ、この時代に即応した活用方法として、収益性のある新しい業態で再生させることを発案された。そして、(株)アイディーユーや(株)日本エスコンと共同して、サービスオフィスとしての新しいビジネスモデルの導入に踏み切ったという。

※(株)アイディーユーは一九九九年に設立された不動産オークション、コンサルティング・リモデリングなどを行うベンチャー企業。(株)日本エスコンは、店頭公開企業で「ネバーランド」のマンション開発などを手がけている。

そのビジネスモデルとはこうである。新たにSPC(特定目的会社)を設立し、生駒時計店との間にマスターリース契約(十年間の定期借家権)を締結。アイディーユーと日本エスコンが、ビルのリモデリング企画からテナント入居募集やオフィス運営などの業務を受託する。

次に運営である。今日オフィスビルのそれは難しいとされる中で、ホスピタリティを重視した、ホテルの中で仕事ができるような「コンシェルジュオフィス」を実現。「北浜T4B(タイム・フォー・ビジネス)」とネーミングした(Tは生駒時計店の歴史的価値を意味するTIME、4は、ホスピタリティ、パートナーシップ、エンパワーメント、バリューの四つのキーワード、BはBUSINESSを表している)。

一階のレセプションでのホスピタリティサービスとして、例えば、電話の取り次ぎ、来客対応、書類作成、発送業務、コピー・ファックス代行、さらにスケジュール管理、各種備品購入、各種チケットの予約など、秘書的業務を行う。入り口には専属のドアマンが常駐している。二階から五階の二十八室には、全て机・椅子、多機能電話、インターネット回線が用意されている(賃貸料は七万六千円～二十九万八千円、二坪から七坪まで七タイプの部屋がある)。その他、ボードルーム、ミーティングルーム、ドリンクコーナー、OAコーナーもあり、外観のイメージとは逆の、近未来的なデザインが施された。とはいうものの、一階には、かつてこの時計台にあった英国製の鐘を象徴として飾ってあったり、旧エレベーターやステンドグラスなども残っており、外観とともに創立当初の雰囲気が十分に感じられる。

エントランスロビー／コンシェルジュオフィス

平成十五年四月現在、関西のコンサルティング関係の会社や弁護士、建築家など十四件の入居者があり、他にも交渉中のお客さまがあるという。「民間でできる工夫で、民間の所有で維持していくこと、それが地域社会への貢献であり、なにわ商人魂である」と言われる生駒社長。新しく創出されたビジネスモデルが、今後どのように実を結び、他の近代建築物の再生に活用されるか、見守っていきたい。

旧大中証券ビル
―フランス料理レストラン「シエ・ワダ」―

北浜からほど近い高麗橋に旧大中証券ビルがある。この赤煉瓦の外観をそのまま残して、内部を改装したフランス料理レストラン「シエ・ワダ高麗橋本店」が、平成十四年の十月にオープンした。

このビルは、明治四十五年に辰野金吾氏（辰野・片岡建築事務所）が設計を行った、独特のアクが強い意匠が特徴である。当初は保険会社が使い、その後、大中証券が五十年あまり入居後、移転。ビルのオーナーが再生方法のコンペを行い、二〇〇件の応募から「シェ・ワダ」のオーナーシェフ和田信平氏の案が採用された。

外観の年齢を重ねた美しさを大切にするため、外壁の煉瓦も洗いを一回におさえ、新しい樋もわざと腐食させて落ち着いた色にしたという。看板やメニューもあまり目立たないようにさりげないものになっている。それに対して内装は、徹底的に手が加えられた。「九十年前の建物をどう保存するかという時、残す意味があれば、長期的な視点で取り組みたかった。短期的な計画で改装するのは、建物をただいじめているだけだ」と和田シェフ。実際、建物調査をしてみると、建築上ゆがみや矛盾だらけで、持続させるためには「木の床を取り去り、腐った土を掘ってコンクリートを打ちなおす」（和田氏談）作業が必要であり、昔の面影を残すことより、新たなコンセプトを生かすことを優先させた。もともと本格的なフレンチの店を目指していたため、内装も銀・プラチナカラーをコンセプトに（金はメッキのイメージでニセモノ感が免れないからだそうだ）、フランスから取り寄せたインテリアなど、かなりのこだわりが見てとれる。「華美にしない、アミューズメントパークにしない、レトロにしない、陰気臭い・湿気臭いというのはNG」。暖炉や職人による漆喰塗りの壁、時間を経るにつれて腐食する鏡など、生きている建物として「いい皺」ができるよう工夫されている。隣接する浪花教会（昭和五年、ヴォーリズ設計）裏にあった三十坪の空き地が、調理場として利用できた偶然も重なる。「今、大阪人が外国のVIPをもてなすのはどこかというと、たいていホテルチェーンの店。やはり大阪自慢の店として、守るべきものを創っていきたい」という和田シェフの思いが、この建築物を今息づかせている。

フランス料理レストラン「シェ・ワダ 高麗橋本店」

和田 信平 氏

新井ビル

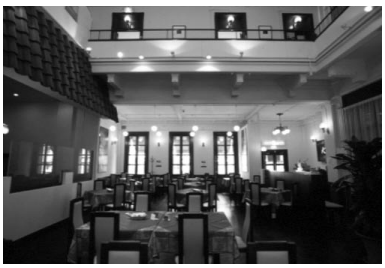
もとは報徳銀行大阪支店。大正十一年、河合浩蔵の設計である。登録有形文化財。十九世紀末から二十世紀初頭、ヨーロッパでおきた伝統様式からの解放を志向する建築運動により生まれた新様式のデザインは、様式的細部を幾何学的な線に置き換えたゼツェッション（分離派）と呼ばれるもので、そのデザインが施された柱頭が特徴的である。新井ビルには、報徳銀行の後、レストラン・弘得社が入り、二十五年程営業していたが、昨年九月、無国籍料理「DINING & BAR Koさ」として経営者が変わった。外から見ただけでは、もと銀行だとわかりにくいが、中に入ると吹き抜けの回廊や個室があり、上の廊下から執務を監視していたのが想像できる。天井が高く、大理石や瓦などの重厚な雰囲気はそのまま残されており、ひと昔前の映画に出てきそうな、妙な懐かしさと落ち着きが感じられる贅沢な空間が広がる。

大西 淳平 氏

ホールマネジャーの大西淳平氏によると、「登録有形文化財に選ばれる程の外観なので、高そうなお店だと思って、若いお客さまが入りにくいのではないかという懸念もあります。お客さまに、いろいろな料理を楽しんでいただきたくて無国籍料理にしましたが、そのカジュアル感と外観のギャップがありますね。個人的には趣がある雰囲気は気に入っていますが、空間の創り方や営業手法について、今は手探り状態です」。だが、ランチは非常に人気があり、行列ができるほどである。昔の面影を残しながらも新たにバーカウンターを設置するなど、時代を意識した独自の場づくりに挑戦している。

このビルには、レストランの他に貸室もあり、小さなギャラリースペースにもなる。急な螺旋階段も、創建当時の面影をそのまま残している。

新井ビル外観


Koさ内

新井ビル内螺旋階段

開かれるモダニズム建築
―積極的活用による保存―

この他にも、大阪にはさまざまな近代建造物が維持活用され続けている。例えば、大正十年に建設された「青山ビル」。喫茶店やギャラリーなど、こぢんまりとしたあたたかさを感じられる。その隣の「伏見ビル」は、昭和の初めに建てられ、当初はホテルであったが、現在は主に貸しオフィスとして使用されている。ここに入居した人たちは成功するというジンクスがあるようで、「出世ビル」という別名があるとか。オーナーさんの趣味を生かした一階のギャラリー「もず」や、入居者とのフェイスツーフェイスのお付き合いも、このビルの魅力の一つになっているようだ。その他、「高麗橋野村ビルディング」（昭和二年）、「船場ビルディング」（大正十四年）など、それぞれの時代を反映する建造物で、界隈の歴史的景観を支えている。また「大阪ガスビル」（昭和八年）も、昨年、八階のガスビル食堂をリニューアルオープン、創建時の文化を再現する方向で、新たな発信を試みている。

もともと住宅やオフィス仕様で、一般の人にとっては、外観でしかその雰囲気を味わえない近代建築物が多かった。が最近、仕様変更も含めた改装によって、レストランや喫茶店、ギャラリーなど開かれた場に変わり、その独自の空間で、ゆっくり時間を楽しむことのできる建築物も少しずつだが増えている。建築当初の面影を重視して改装されたものや、全く異なるコンセプトによりオリジナルの演出が施されたものなどさまざまであるが、各々オーナーや経営者の思い入れやメッセージ性の強い「場」ができあがっているのが興味深い。

今回紹介した北浜界隈以外にも、大阪には保存活用されている近代建築物が数多くあり、リモデリング（再生）の事例も増えている。その遺産を見直し、今日的なニーズとセンスを反映させながら活用して生かす、その試みは、大阪という都市自体のリモデリングを支え、新たな都市文化を生み出す大きな力になるに違いない。

（大阪ガス エネルギー・文化研究所 研究員）

青山ビル

伏見ビル／ギャラリーもず

ガスビル食堂内のバーカウンター

高麗橋野村ビルディング

船場ビルディング

主な参考文献

『都市の近代・大阪の二〇世紀』芝村篤樹 著 思文閣出版 平成一二年
『関西の近代建築』石田潤一郎 中央公論美術出版 平成八年
『近代大阪の五十年』大阪都市協会 昭和五一年
『近代大阪年表』NHK大阪放送局編 昭和五八年
『近代建築ガイドブック 関西編』鹿島出版社 昭和五九年
『近代名建築浪花写真館』福島明博 機関紙出版 昭和五九年
『関西のモダニズム建築二〇選』淡交社 平成一三年
「大阪春秋」一〇二号「おおさか昭和モダニズム」大阪春秋社 平成一三年
「大阪人」VOL 五四、五五、五六 他 大阪都市協会
「日経アーキテクチュア」二〇〇三・二～三平成一五年 日経BP社
「モダン都市大阪―近代の中之島・船場―」大阪市立住まいのミュージアム 平成一四年 他